大量ストリームデータのリアルタイム処理に向けた柔軟なアーキテクチャ探索と設計環境構築

小型・高速・省エネ！
マルチなプロセッサ

東京工業大学　工学院　情報通信系　　原　祐子

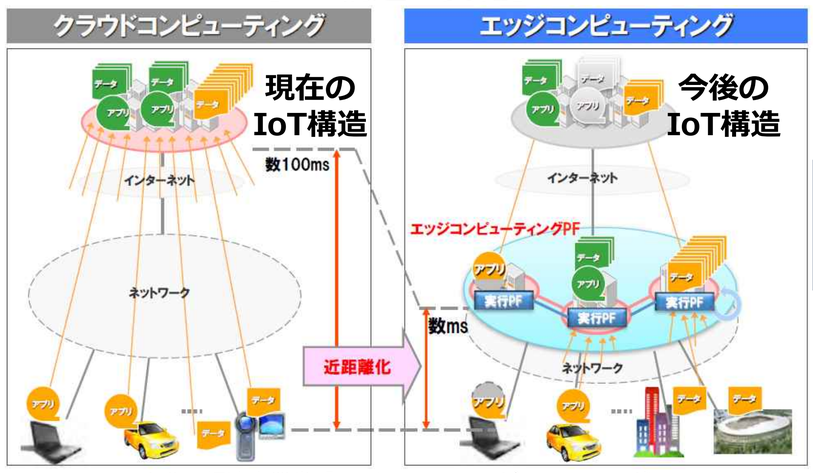
I. 背景（解決したい問題）・ねらい

- IoT端末やセンサ：発達・普及
  - ・人・モノが絶え間なく生成する ストリームデータ増加
- アプリケーションの多様化
  - ・汎用アーキテクチャ（プロセッサ）：多様なアプリを処理するためにハードウェア資源増加
    → アプリによっては使用しない（＝無駄になる）資源多
  - ・アプリ特化型アーキテクチャ：再利用不可（＝設計コスト大）

【近年の動向】
アプリ：多様化＆複雑化
プロセッサ：高機能化・大規模化

出典：日本経済新聞 電子版 (2012/2/22)
「スマホやタブレット、高性能で電池長持ちに」

【IoT構造の変化】



出典：経済産業省「IoTとエッジコンピューティング」

● ねらい ●

- エッジコンピューティングでストリームデータ処理
  - ・ビッグデータ効率活用
  - ・リアルタイム（実世界の制御）実現
- 新たな**次世代情報処理基盤技術**を確立
  ＝IoTエッジ端末向け計算機システム

II. 未来への展開・インパクト

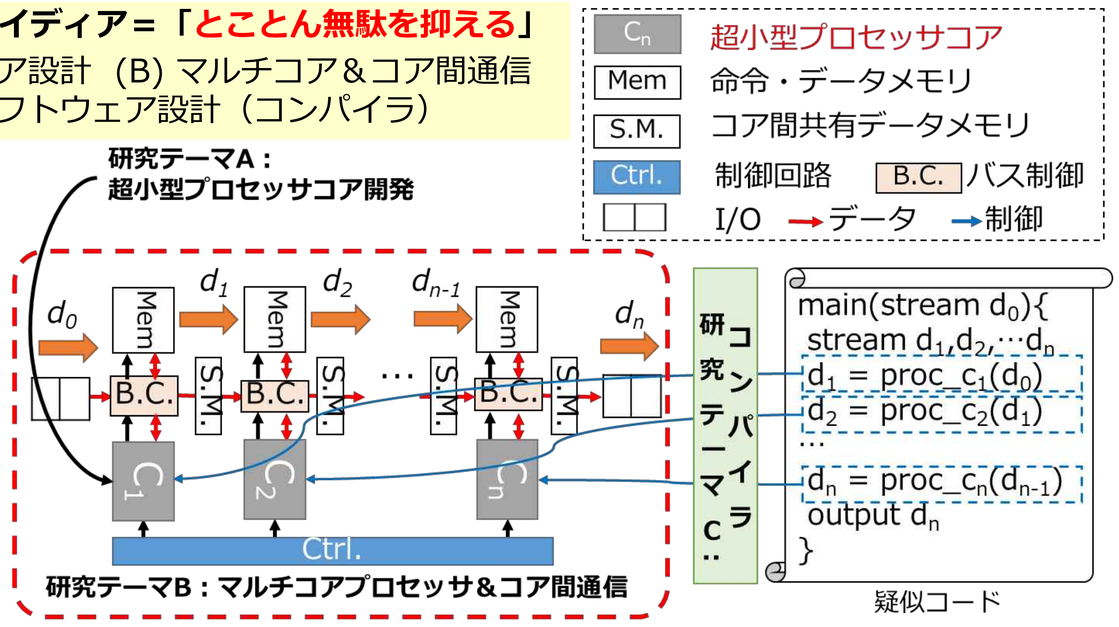
- IoTエッジ端末に搭載でき，収集したデータを直ちに処理できる**新たなアーキテクチャ**の仕組みと設計手法を開発
  - ・少子高齢化社会 → 介護・自立支援・見守り
  - ・スマート工場・社会インフラ → 監視・異常検出
  - 安全安心社会を実現
- IoTエッジ端末とサーバとの通信を削減
  - ・消費エネルギー削減 → 低炭素社会への貢献
  - ・セキュリティ強化・プライバシー確保
- 日本技術を世界のスタンダードに
  - ・日本の強み（リアルデータ蓄積量・センサ技術）を活かし支える
  - ・新たなサービス・ビジネスの創出

III. 研究成果

- **小型（＝低製造コスト）・高性能・省エネルギー・再利用性（＝低設計コスト）**をすべて満たすアーキテクチャ設計を実現
  - ・商用小型プロセッサに勝る有用性を実証
  - ・1コア：0.43倍のサイズ＆0.61倍の処理時間＆0.25倍のエネルギー
- アーキテクチャの構成を柔軟にカスタマイズ可能
  - ・コア数を増やして更に処理時間を短縮することも可能
  - ・2~4コア（＝マルチコアプロセッサ）：0.37~0.21倍の処理時間
- ドメイン指向型のトップダウン設計の効果・意義を実証
  - ・これまでのボトムアップ式設計は限界・非効率
  - ・今後のIoT向けアーキテクチャにとって重要な設計アプローチ

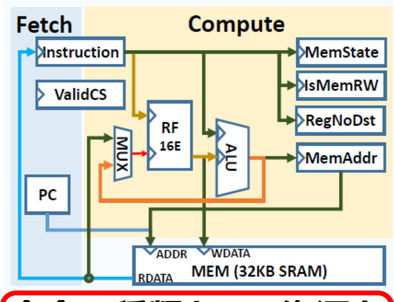
IV. 提案アーキテクチャ

キーアイディア＝「とことん無駄を抑える」
(A) コア設計　(B) マルチコア＆コア間通信
(C) ソフトウェア設計（コンパイラ）



A. 超小型プロセッサコア：SubRISC

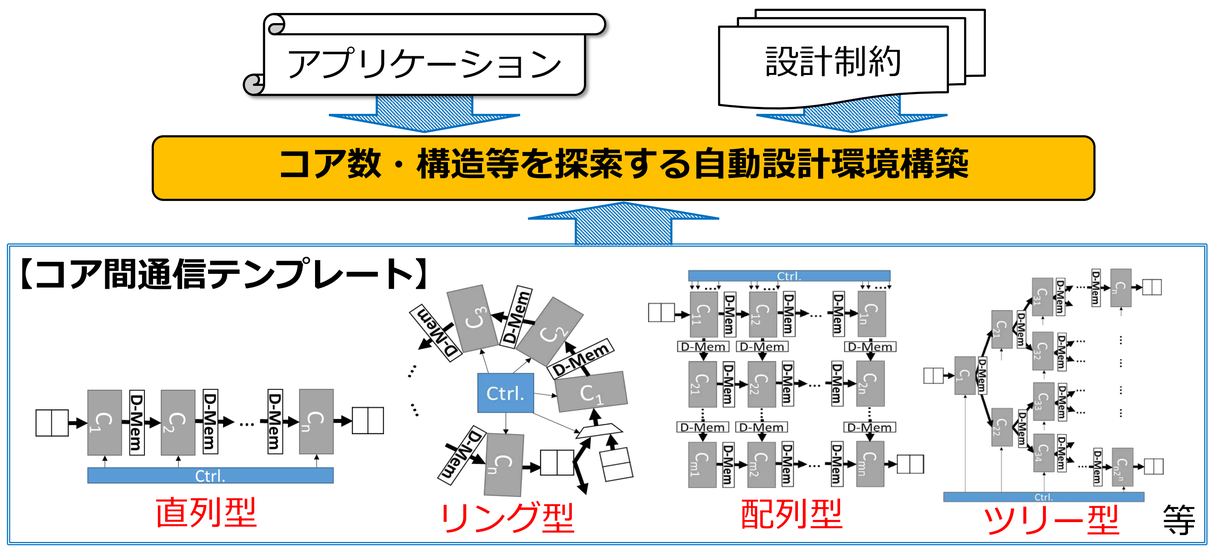
- 単一命令セットコンピュータ（**SNG**: Subtract and branch on NeGative with 4 operands）をベースとして拡張
  - ・超小型＆シンプルな構造を活かす
  - ・ISA：回路増加が少なく計算の非効率さを克服
    1. *sng*: 減算＆分岐（SNGのオリジナル命令）
    2. *and*: 論理和（オリジナルALUの一部を利用）
    3. *sht*: シフト（配線＆MUXのみで実現可）
    4. *mr* & *mw*: メモリアクセス（レジスタ導入）



命令の種類とHW資源を制限したデータ前処理向けプロセッサ

B. マルチコアプロセッサ＆コア間通信

- 超小型プロセッサコア (SNG/SubRISC) を利用したマルチコアプロセッサ
  - ・パイプライン式に処理 → **高スループット**
  - ・データ量やアプリに応じた柔軟なコア数・配置 → **エネルギーロス削減**
- 再利用性とカスタマイズ性の両立
  - ・プロセッサコアはそのまま**再利用** → 高い設計生産性
  - ・コア間通信はテンプレート化 → **カスタマイズ**



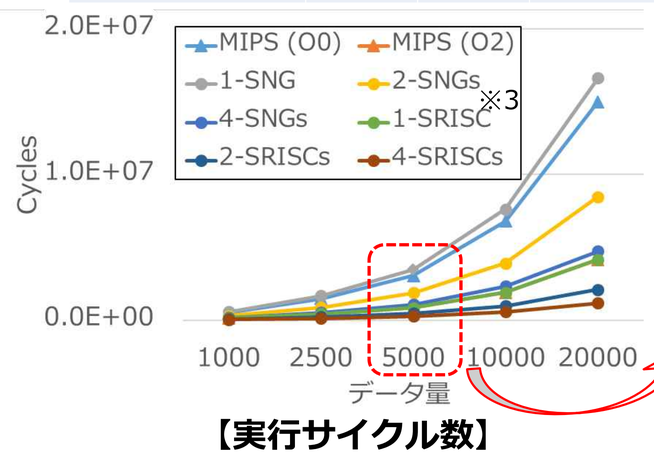
C. ソフトウェア設計（コンパイラ）

- LLVMコンパイラフレームワークの中間表現 (IR) を利用
  - ・SNG/SubRISCのバックエンド部分を作成
  - ・フロントエンド＆ミドルエンドの最適化機能は利用可

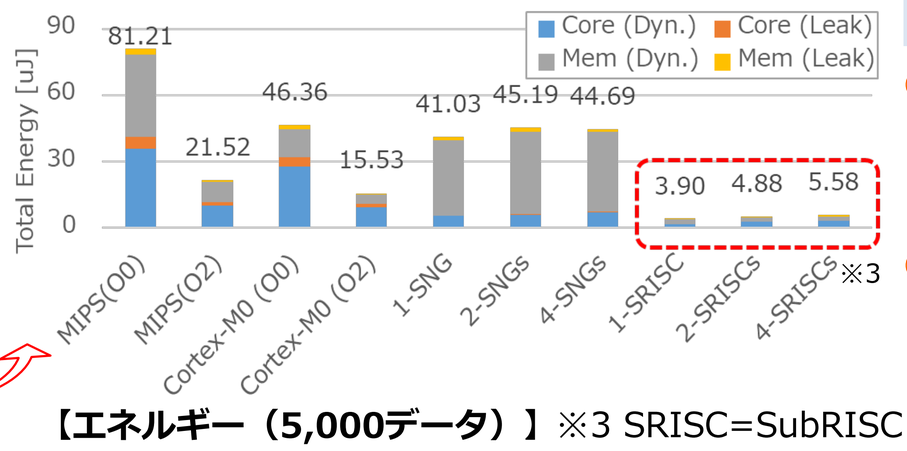
V. 評価結果（ベンチマーク＝ソーティング；コア間通信＝直列型）

【回路面積】※1 メモリ＝64KB　※2 メモリ=32KB

45nmプロセス 500MHz	MIPS O0※1	MIPS O2※2	Cortex-M0	提案1（上段；SNG）＆ 提案2（下段；SubRISC） 1コア	2コア	4コア
コアのみ [x10³ um²]	35.4	35.4	17.9 (x0.51)	2.5 (x0.07)	4.9 (x0.14)	9.9 (x0.28)
				7.7 (x0.22)	15.4 (x0.44)	30.7 (x0.87)
コア＋メモリ [x10³ um²]	625.2	396.0	607.7 (x0.97)	363.0 (x0.58)	726.1 (x1.16)	968.1 (x1.55)
				145.0 (x0.23)	290.0 (x0.46)	580.0 (x0.93)



【実行サイクル数】



【エネルギー（5,000データ）】※3 SRISC=SubRISC

- **本研究成果（優位性）**
  - ① **小型・高スループット・エネルギー高効率・再利用性**をすべて満たすアーキテクチャ設計を実現
  - ② **ハードウェア・ソフトウェアからの包括的アプローチ**
  - ③ **今後のエッジコンピューティングのニーズを見据えたドメイン指向型設計**

● 今後の展開

① 設計環境の充実化
- ・異なるコア間通信＆ソフトウェアタスク分割・マッピング
- ・ハードウェア＆ソフトウェアの包括的な設計空間探索

② 上下設計レイヤとの融合
- ・上層レイヤ（アプリ・アルゴリズム）や下層レイヤ（デバイス・センサ）との融合
- ・アプリ→デバイスのドメイン指向設計法を確立